

# 令和五年度 一般選抜入学試験（後期）

## 小論文

### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は表紙を含めないで3ページあります。解答用紙は3枚です。  
下書き用紙は1枚あります。  
試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 3 試験開始の合図があつたら、まず、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入してください。
- 4 解答はすべて解答用紙のそれぞれの解答欄に記入してください。
- 5 試験時間は90分です。
- 6 解答用紙は記入の有無にかかわらず、持ち帰ってはいけません。
- 7 この問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、問いに答えなさい。

### 情報化社会のなかで

情報社会、あるいは情報化社会と言ってもいいんですが、そこで懸命に生きていこうとすると、まず出てくる悲鳴があります。つまり、あまりにも多くの情報があつて、そのなかのどれが本当なのか、何を選んだらいいのかわからない。今、流行<sup>はや</sup>っているものの情報に熱心であればあるほど、世間で流行っていることを知らないと自分が遅れるんじゃないか、という焦りみたいなものが人間を突き動かすのが情報化社会の特徴です。そういう社会に適応しようとするれば、この情報の洪水のなかで溺<sup>なほ</sup>れてしまう人間が出てきます。

私は情報化社会と情報社会をこつちやに使っていますが、今だんだん「化」が抜け落ちてきているという事なんです。ではどうすれば情報社会のなかで溺死にしないですか。

現代社会において、我々が摂取しているもののなかには、情報 ① がとても多い。これを「I」とします。で、次が知識 ② 「K」です。そして、本当の意味での知恵、つまり、人間の賢さというか、判断する力。これを ③ と言いますから「W」とします。I、K、Wが形作る三角形。これが、仮に私が名付けた「知の三角形」です。

情報に溺れそうだという人たちは、この「I」の摂取量はかりがやたらと多くて、それを判断するための知識「K」の面積が小さい。さらに最終判断のための「W」の面積は圧倒的に狭い。

自分で最終的に判断して、自分でこうだなと考えるメダイアリティという学問が最近盛んに言われていますが、これには「W」の領域が大いに関係しているんです。

ネットのなかから情報を得ても、その情報が本当か嘘かを判断しなければならない。情報社会のなかで生きるには、「W」の領域を増やさなければなりません。その努力をあまりしないで「I」の摂取ばかりをやっているから、この三角形の形が歪んで、足場が不安定になってグラグラする。だから私たちがやるべきなのは、「知の三角形」の形を正常に戻すことです。

三角形の上方の「I」のスペースを適度にして、真ん中の知識量「K」を増やし、さらに底辺の「W」、判断する能力のスペースを広げていく。こうすれば、この三角形は座りが良くなって安定するわけです。

問題は、具体的にそれをどうやるのか。いきなり人間が賢くなって、「I」の領域から一気に「W」の面積が増えることはありません。だとすれば、この真ん中の領域「K」、つまり知識というものが非常に大事になってくる。

例えば今世界で起きている非常に険しい事態の一つは、言うまでもなくパレスチナ問題です。イスラーム教世界とキリスト教世界、それにユダヤ教世界が真正面からぶつかり合っている。

みなさん、中東世界の地図を明確に頭のなかで描けますか？ 多分、きちんと知っている人はあまり多くはないはず。ジャーナリストでさえ、きちんと地図を描ける人は少ない。

レバノンがどこにあつて、パレスチナとはどこを指すのか、シリアの位置とイスラエルとの関係は

……と、非常にぼうつとしていて分かりにくい。

分からない世界で暴動が起きたというニュースが入ってきて、本当に何が問題なのかを正確に理解することは難しい。そうであれば、中東で毎日起きているニュースをしばらくは置いて、イスラム世界とは何か、中東とはどういう地域なのか、それをじっくり勉強する、あるいはその知識を貯える、ということのほうが大バランスの取れた理解へ向かえるということは、容易に想像できると思います。

つまり、メディアリテラシーの問題もそうなのですが、自分に知識がないために、マスメディアが伝えるもののほうへ、一方的に誘導されていってしまう、ということが起こりがちなんです。

## 表現への欲求

人間とは、本来何かを表現したいという欲望をもっています。その次には、表現したのについて共感してもらいたいと思う。多くの人に「お前の考えていることはもつともだな」と認めてもらいたい。さらに先を言えば、そういう表現をすることが自分にとって必要であり、人に必要とされる人間になりたいという欲求があります。

こういう欲求を強烈にもっている人間は芸術家になったり、あるいは企業の社長になるかもしれない。人間の欲望のなかには、金銭欲とか名誉欲とかいろいろあります。権力を欲しがると、あまり権力欲のない人、個人差はあるんですが、表現というものに関して言えばかなり共通したものをもっている。

表現とは、英語では ④。内側にあるものを搾り出す、というのがもともとの語源です。日本語の「表現」というのも僕は面白いと思う。表に現す、ですからね。中国語では「表達」だそうです。これも、表に達する。要するにどれも、なかにあるものを外に出すということです。

つまり表現とは、自分のなかにあるものを表に出すわけですが、その前提として、自分のなかに何かがないとやいけない。何もなければ表現のしようがない。中身とは何かと言え、もちろんいろいろあるけれど、精神というものと関係します。あるいは心と言ってもいいかもしれない。

例えば、音楽家が自分のなかにあるものを表出して曲を作る。文学者が自分のなかのものを文章化して小説を書く。絵を描く人は自分のなかのイメージを具体的に絵の具を使って表現する。しかしどの場合だって、中身がなきやダメなんです。中身を作らなきやならない。それが実は学ぶということの一番の基本、エッセンスでしょう。

さっき言った「知の三角形」の真ん中のところに、どうやったら知識を蓄積できるのか。これが学ぶということ、あるいは情報化社会のなかで生き延びるということにつながるんですが、二つのことがあります。

まず、キーワードの体系化ということ。バラバラに捉えた知識というもの、あるいは記憶というものは身につかない。これは、脳科学なんかから出てくる話です。つまり、知識というものが自分の内面の身につくには、ある種の体系化が必要なんです。いろんなもののつながりのなかで物事を覚えていくということです。

円周率を記憶するコンテストというのがあります。3.14……という延々と続く数字の羅列、あれですね。このコンテストでは、今までずっと、若い人しか勝てないと思われていた。実際、ある時期まではそうでした。ところが、ソニーの中年の会社員が世界チャンピオンを獲り続けたことがあったんです。

私は彼に「なぜそんなことが可能なのか？」と聞きました。「長い間人生を生きてきた人間のほうがたくさん知識をもっている。数字を覚える時に、いろんな形のイメージーションで覚えていく。そういうイメージは大人のほうが多くもっている。だから自分のほうが若い人より有利なんです」というのが彼の答えでした。

記憶力という点では若者のほうが優れているけれど、体験というものを組み立てる力は彼のほうが強い。そういうことなんです。

つまり、どらやつて知識を体系化していくが、これがまさに学問、学ぶということじゃないでしょうか。

(筑紫哲也『若き友人たちへ』による)

問一  ①  ④ には英単語(名詞)が書かれています。それぞれを英語で答えなさい。

問二 傍線部「知の三角形」を用いて、筆者は、(A) 情報社会で陥りやすい状況と、(B) 正常な状況についての考えを述べている。この二つ(A、B)について、あなたは、筆者がどのような図をイメージしていると考えますか。問題文の文意に沿って、それぞれI、K、Wの位置関係や面積がわかるように図で書き示すとともに、それらの図が示していることを100字以内の文章で説明しなさい。ただし図はフリーハンドで書き、I、K、Wの面積はおおよその大小や違いがわかるように描いてください。

問三 波線部「メタイアリテラシー」を、本文の内容に即して、50字以内で説明しなさい。

問四 点線部「表現への欲求」以降の文章(人間とは……学ぶということじゃないでしょうか)を100字以内で要約しなさい。

問五 二重線部「どらやつて知識を体系化していくが」について、筆者の考えをよまえて、あなたはどうのように考えますか。自分の体験や具体例をあげながら、400字以内で述べなさい。